

第二十七章 竜宮城の死守 (二七)

一竹熊、魔子彦、熊彦の三角同盟軍は、前述のごとく内部の暗闘より統制力を失い、一時は諸処に潰走した。そのため暫時の間は、地の高天原もやや小康を得ていた。

以前の失敗に懲りた竹熊は攻撃の方法を一変し、こんどは千辛万苦の結果、敵の御魂の信任を得ることに努力した。敵の御魂はやや安堵され、彼らはほとんど改心の実を挙げたものと思われ、少しく油断があつた。そこで竹熊は策の当れるを心ひそかに喜びつつ、敵の御魂の系統なる木常姫と力を協せ、心を二にし内部より竜宮城を瓦解し、両神は竜宮城の王たらむとの手筈を定めた。竹熊は自分の妻なる菊姫にワザと汚点をつけこれを離縁し、猿飛彦の妻なる木常姫を奪むとした。

ここに猿飛彦は竹熊の謀計を覚り、怒つて木常姫を追い出した。竹熊と木常姫は謀計の凶に当れるを喜び、竜宮城に参上り言葉たくみに猿飛彦や、菊姫の乱倫悪行の数々を捏造して、これを敵の御魂に進言した。

ほとんど信任した竹熊、木常姫の言に耳を傾け、敵の御魂は竹熊と木常姫の結婚を事情やむを得ずとして、許されることになった。ここに大八洲彦命と金勝要神は、猿飛彦と菊姫の詳細なる陳情によつて彼らの陰謀を知悉された。竹熊が木常姫と結婚せむとした真の目

的は、木常姫が、敵の御魂の肉身の系統であるから、自分の権勢力を増しておき、徐に時を待つて竜宮城を占領せむとしたのである。また木常姫は夫なる猿飛彦の頑迷にして、かつ強硬なる態度に、やや嫌忌の情を発していた際であるから、表面温良にして多くの者の信任厚き竹熊と夫婦になり、金勝要神や、大八洲彦命の地位に取って代らむと考えたからである。

竹熊らの陰謀を知悉したる大八洲彦命は、金勝要神と共に面を冒して敵の御霊に諫言し、かつ速かに竹熊と木常姫の結婚を、破棄せむことを道理の上より強請した。この様子を窺い知つたる竹熊と木常姫は、大いに怒つて大八洲彦命に打つてかかった。しかして一方木常姫はあまたの魔軍の応援を得て、金勝要神を八方より挾撃し、ほとんど窮地に陥れむとした。ここに小島別は、仲裁の勞を執らむとして少数の軍を引率し、急いで竜宮城に馳せ参じ、百方手を尽した。しかるに戦闘はますます激烈となつた。しかして竹熊はエデンの園に陣を取り、木純姫、足長彦らを参謀として陣營を構えた。

このとき地の高天原も、竜宮城も暗雲に包まれ、天地は惨憺として咫尺を弁ぜざる光景である。そうして天の一方よりは、数万の魔軍が竹熊にむかつて応援する。その時の大將は大森別、加津彦、杉森彦の面々である。にわかには雷鳴天地にとどろきわたり、雨は盆を覆えずごとく、東北の風は、地上一切のものを天上に巻き上げむとするの惨状であつた。

ここに敵の御魂は驚きおそれて竜宮城を立ちいで、高杉彦、安熊らの部将を引率れ、シ

※知悉……詳しく知ること。

※面を冒して敵の御霊に諫言……体面も何もすてて開祖に対し人の非をいさめること。

ナイ山（ないな）に避難（ひなん）された。しかして後（あと）には金勝要神主（きんかつのかみしゆさい）宰（さい）の下（もと）に小島別（こじまわけ）、元彦（もとひこ）、高杉別（たかすぎわけ）を部将（ぶしょう）として、竜宮城（りゅうぐうじょう）を死守（ししゆ）した。この時地（ときち）の高天原（たかあまはら）も、竜宮城（りゅうぐうじょう）も惨憺（さんたん）たる光景（こうけい）で、殆ど全滅（ぜんめつ）に近（ちか）かったのである。

（大正一〇・一〇・二二 旧九・二二 外山豊二録）

瑞 月

常暗の夜となり果てし龍宮も

うしとら神の風に晴れつゝ

竹熊はエデンの城にこすみ姫

足長彦のながもちもせず

※エデンの園……ここでは綾部の位田の地を言う。

※咫尺を弁ぜざる光景……暗くて、近くのものでも見分けがつかないさま。

※シナイ山……綾部の東北に聳える霊峰弥仙山のこと。